

# 時局に思う



日本遺族会会長  
参議院議員

## 水落敏栄

九月十日未明からの豪雨で、栃木、茨城、宮城の広範囲で甚大な被害が発生いたしました。被災されました方々に心よりお見舞い申し上げます。今回の豪雨は関東から東北、北海道まで広範囲に被害を及ぼしました。収穫前の時期にこのような自然災害を受け、農家の方々のご心中はいかばかりかと思えます。政府与党は迅速に被災者の皆様の救済に乗り出さなくて

はなりません。  
秋の田んぼを見るたびに思い出す出来事があります。

私は新潟県十日町市という豪雪地域に生まれました。三反の田とわずかな畑で農業を営み、冬は出稼ぎに行く父と母、兄、姉の五人家族で、貧しくも幸せな家族でしたが、昭和二十年八月大黒柱で

な現金収入源だった為、私たち家族は米を精米した後にでる粉を団子にして食べていました。それはひどい味で、父がいない寂しさも加わり惨めな気持ちになりました。その為、白米を食べる日は、「今日は白米が食べれる」と近所中に触れ回っていたと今でも笑われます。

## 戦争の体験を語り 若者へ命の尊さを伝える

あった父が戦死し、我が家は壮絶を極めました。

母は、土木現場や農作業の手伝いに出かけ、夜は内職をし、早朝は我が家の狭い田畑を耕し、まさに男になって私達三人を育ててくれました。

故郷は魚沼産コシヒカリの本場でありますが、我が家は米が貴重

今や日本全国どこにいても二十四時間白米が食べられるようになりました。経済的に豊かになった一方で、「人を殺してみたかった」という少年少女の事件や、いじめで命を絶つ少年少女が後を絶たしません。子供は社会の鏡です。この社会に命を尊ぶ精神が欠陥していると云わざるを得ません。

IT化が進み、買い物や公共料金の支払い等さえ、誰とも顔を合せず済ませることが出来る世の中です。十代、二十代の若者は、ソーシャルネットワーク(SNS)で対話しても、直接話すのは煩わしい、しかしSNSでのつながりは大切にスマホを手放せない。彼らは本当は絆を求めているのではないのでしょうか。

先の戦争では多くの若者がたくさん夢や希望を持ちながら、亡くなっていきました。命の大切さ、はかなさを感じる事が難しい今だからこそ、戦時下で生と死をみつめた私たちの体験は、生きることの素晴らしさを考えさせる一端になるのではないのでしょうか。故に若い世代に私たちの戦争体験を語ってゆきましょう。平和な社会とは、全ての命を尊ぶ気持ちから生まれる社会であり、こうした地道な活動こそが大きな根を張ると私は信じています。